メディアラ［京都から世界へ］
メディア・グラフィック
http://www.kyoto-media-arts-lab.jp/

MediaLa

KYOTO Media Arts Lab. Information

No.2
JAPAN 3.11
Special Issue
March.2014

「見る」、「撮る」、「伝える」

◉特集―京都発【まちの記憶と未来】―

映像が時代を変える

「いつかなんて
来ないのかもしれない」

残そう、あなたの記憶。
伝えよう、あなたの思い。
きっと誰かが
つないでくれる……

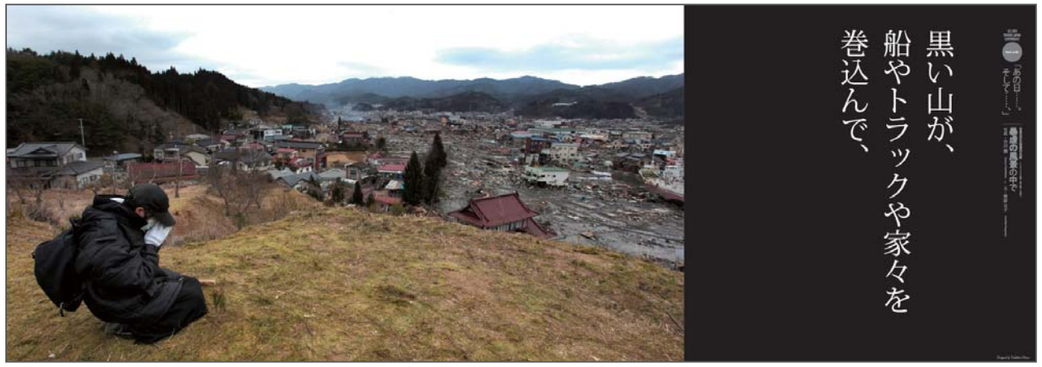
君のまなこに　うつりし我は
ただただ　ひたすら　生きたしものを

菅原文子

「あの日……。
そして……、」

2011年3月から３年目。
福島原発の立ち入り制限区域で
人間が居なくなった道を歩く
イノブタの親子。
殺処分されずに、子供たちに
命がつながっていることに安堵する。
彼らもまた、生きたしものの姿なり。
ただ、人間たちの日常は、
いま、ここに存在しない

写真：吉川譲



◉東北巨大地震の爪痕

「あの日から心のレールがつながって」

《京都・嵐山・嵐電車内で写真展 写真：吉川譲 文：菅原文子》

「福島・三春の滝桜の苗木、嵐山移植1周年記念」

東北大震災の記憶を風化させないために立ち上がったフォトジャーナリスト：吉川譲さんと、福島・三春の滝桜を東北震災の記憶のシンボルとしようと京都・嵐山に、その苗木を移植した長井喜美さんの思いが、走行する嵐電車内での写真展となった。
テーマは 3.11 東北震災の記憶。
いまなお復興の兆しが見えない東北被災者の力に、少しでもなれたら……の思いを届けたい。
苗木には<キミマツサクラ>と命名された。

◉人は記憶の中に生きる

2011年3月11日。人々が予想だにしなかった巨大地震が東北で起きた。死者、不明者約二万人の犠牲者。あれからまる3年が過ぎた。いまや日常からは、東北震災のニュースはほとんど流れない。津波も福島原発の事故も無かったかのように記憶から剥ぎ取られていくようだ。

そこで、記憶を風化させないためにと企画されたのが、京都市内を四条大宮から嵐山を走る電車の中での写真展。3月11日に合わせて行われた。テーマは、＜東北巨大地震の爪痕・暴虐の風景の中で＞。カメラマンは、フォトジャーナリストの吉川譲さんで、この3年間、東北震災の現場を地震発生直後から追い続けている。

写真には被災者の生々しい現実と心の様子が映し出されている。電車にたまたま乗り合わせた客は、いつもと違う車内吊りに目を凝らし、さっそく写真を撮ったり、ツイッターやフェイスブックにアップしていた。

◉偶然が必然へ

写真には被災者の言葉が添えられている。気仙沼で津波に合い、義父母と夫を津波で亡くした菅原文子さんの声が聴こえる。夫は手を取り合った瞬間、凄まじい勢いで波にのまれたという。写真とともに菅原さんの当時の言葉が心に食い込んでくる。

千年に一度といわれる巨大地震が
日本の東北・三陸地方を襲った。
自然の驚異の前で全く為す術がない人間。
揺れる大地、盛り上がる海に引きずり込まれ
飲み込まれていった二千十一年の日本。
科学文明を誇ってきた人類の叡智など
何の役にも立たなかった。
「生きる」という壮絶なドラマは
こんなにも過酷な試練を与えるのか。
絶望を乗り超えて明日へ

菅原さんは、吉川さんが地震発生後3日目に避難場所で偶然出会い、写真を撮ったことから交流が始まった。酒屋を営んでいた菅原さんは、残された二人の息子さんと酒屋の再建に向けて立ち上がり、被災から約1ヶ月半で市内の別の場所にプレハブを建て、営業を再開。菅原さんが書いた手書きの「負けねぇぞ気仙沼」のラベルが評判になり、復興のシンボルにもなった。

また、京都の和紙の老舗・柿本商事主催の「KYOTO KAKIMOTO 恋文大賞」の大賞を受賞。そして「あなたへの恋文」がPHPから出版などなど。そんな縁とつながりが、この度の京都での写真展になった。

◉嵐電ならでは

この写真展の準備は、開催当日まで徹夜で行われた。1週間もの長い間車両を提供頂いた嵐電には、凄い！の声が聞かれた。京都市民の足である嵐電ならでは。企業と市民が一体で参画。昨年、嵐電・嵐山駅構内に移植された東北震災・福島・三春の滝桜の苗木移植1周年記念と合わせて行われた。心のレール、何処までもつながって欲しい。

主催：キミマツサクラ桜色福プロジェクト
協力：京福電気鉄道(株)
京都メディア・アート・ラボ

あらためて市民映像作家の「場」について考える

佐藤博昭 —— SATO-Hiroaki
ビデオ作家
ビデオアーティストグループ「SVP2」代表

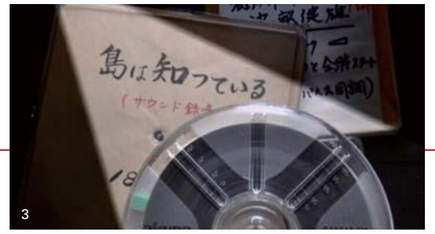
■佐藤博昭（さとう・ひろあき）
1962年生まれ。教員ビデオ作家。日本大学芸術学部映画学科卒業。86年より極私的ビデオ制作を続ける。ビデオ作家グループ「SVP2」代表。97年より、自ら作品上映の場を作ろうと開始した上映会『無礼講にする』は、個人映像作家のための定期的なイベントとなっている。また農業情報チャンネルを通じて、地域ビデオリポーターの育成に関わるほか、映像教育セミナー、ワークショップを精力的に行っている。現在、日本工学院専門学校、日本大学芸術学部映画学科、武蔵大学社会学部、東京工芸大学芸術学部、埼玉県立芸術総合高等学校映像芸術科 非常勤講師。東京ビデオフェスティバル審査委員。06年より日本映像学会理事。

◉プロ・アマの垣根を越えた映像制作の世界

7回目を迎えた京都インディーズ映画祭・京都映像アワードに参加させていただいた。主催者が言うように「小さな映画祭」ではあるけれども、この活動がコアとなって地域の問題を考えようという積極的な熱意と、活動自体をみんなで楽しもうとする豊かな姿勢を感じている。私自身が2000年から審査を手伝っている東京ビデオフェスティバル（TVF）とも、共鳴する部分が多い。どちらもこれまでの映像表現を越えていくような力を、個人の、あるいは小規模な制作体制の映像作品に見出そうとしている。その中心は市民映像作家であると言っていい。市民映像といえば、少し前まではビデオ愛好家の趣味の映像を思い浮かべたかもしれないが、現在では驚くような作品が作られている。その背景には、映像制作に必要な各種の機器が高度化し廉価になったことがある。私はここでいう「市民」をアマチュアと同義であるとは思っていない。映像制作のプロであっても、仕事以外で映像を作ることがある。家族にカメラを向けたり、身近に起こった出来事を記録することもあるだろう。あるいは学校で制作された作品や、地域での映像ワークショップの成果にも、何度も驚かされた。映像制作が特別な技能ではなくなり、様々な立場の人が、それぞれの動機でアプローチした結果が、新たな作品領域や作品の独自性を生み出している。

1

2



3

特定非営利活動法人
市民がつくるTVF

東京ビデオフェスティバル（TVF）2014

1. ビデオ大賞『きっと世界は素晴らしい』
川滿佐和子（埼玉県立芸術総合高校映像芸術科 17歳・埼玉県）

2. 筑紫哲也賞『ノネコの引っ越し作戦 ～海を越えて命を守る～』
岡田紗由香（中央大学FLP松野良一ゼミ 20歳・東京都）

3. サポーター賞『広島原爆の惨禍 もう一つの証言映像』
松田治三（76歳・広島県）

◉市民映像作家とは

ところで市民映像作家とは誰を指すのか？この問には自著でとりあえずの定義を試みたことがある。

「市民映像作家とは誰のことかと問われて、明確な答えを出すのは難しい。市民とは単にどこかの地域の住民であることも意味してはいるが、本書では、社会的あるいは政治的な市民参加の意志を有し、住民としての自治と独立を理解する積極的な名称であると捉えたい。当然それは個々の自覚の問題である。そして市民映像を『**映像作品を制作した主体が個人であれグループであれ、特定の利益誘導や商業的な拘束から自立した体制で制作されていれば、それを市民映像と呼ぶことが出来る**』と規定してみる。もちろん、すべてが非営利でなければならないとは思わない。作品の制作資金が、企業や団体から提供されていたとしても、〈何のために作り、誰に伝えようとしているか〉という問いに、曇りや澱みのない答えがあればそれでいいと思う。」

この定義は、すべてを言い当てているとは思わないけれども、多くの作者・作品をカバーできていると思う。自らが生み出した作品に対して、澱みや曇りがないことは、映像にかぎらず重要な事だ。特に実写の映像は、必ず撮影対象が必要だ。それは劇映画であって

TVF授賞式後の懇親会では受賞者や審査委員、
スタッフが活発に交流。
作品を通じて人と人がつながり世界が広がっていく

もそうなのだが、相手との関係の総体が映像作品となる。ひとりで作る創作物に比べて、より「関係」が重要になる。

◉発表する「場」の重要性

そしてもうひとつ重要な事は、市民映像作家たちがそれぞれの作品を発表できる「場」であり、そこでの体験を共有し、次につなげていく循環の「仕組み」を作ることだ。私はTVFの周囲に「作品アーカイブの活用」「ビデオ制作ワークショップ」「映像史・映像理論の学習」「映像批評・キュレーション」といった分科会的な活動を提案し、いくつかが具体化し実行できた。特に継続的に実施した「教師のための映像制作ワークショップ」は、積極的な参加者にも支えられ、その教師の地元・学校でワークショップを行うなどの展開につながっていった。映像配信がPCを中心とした個人の鑑賞環境に移行し、さらにモバイル端末での鑑賞も可能にした今、場所や時間が規定され、さらに参加者が一箇所に集まるといった「場」は明らかに時代と逆行している。しかし、その「場」にしかないものに、可能性も残されている。生のライブ感のようなものだ。だから、映像祭や上映会は、人との関係を実感できる「ライブ」でなければならないと思う。記録媒体に録画されたものを再生する「場」がライブとなるための要因のひとつは、作者と作品の選考者・審査員、あるいは作者相互のやりとりであると思う。作品を巡って様々な論議が出来る「場」も、そうした論議の記録を残して活用することも、映像祭の内部に必要なのだと思っている。

36回目を終えたTVFでは先日NPOの役員が集まり反省会を行った。TVFが発足当初から目指したものは、作品の優劣を問題にするコンテストを行うことではなく、作品発表会を中心としたその周辺の「場」づくりであった。残念ながら、その志は主催者・日本ビクターの撤退(第31回まで)によって資金的な問題を抱えて縮小せざるを得なくなった。現在、NPO法人となったTVFの中心は、年に一度の発表・表彰式であり、その周辺には、いくつかのイベントと連携した作品提供、今年度から開始したVRC(ビデオ・リポーター・クラブ)での作品制作講座などがある。小さな活動だが、できることを継続することに意味があると考えている。そして先日の反省会で論議されたことは、発表・表彰式を継続することだけが目的ではないということだった。発足当初からの志をどのようにして継続して持ち続けるのか? 発表・表彰式をより魅力的な「場」にするためには、スタイルに拘る必要はない。「議論の場の魅力」「作品そのものの魅力」「審査員・審査体制の魅力」を、どのように維持し周知し参加を促すことが出来るか、という論議だった。答えも結論も出ていない。改善のためのアイデアを出来る範囲でコツコツと具体化するだけだ。

「トークフォーラム」(公開審査会)で「ビデオ大賞」を始め各賞を選定。
公開審査では審査委員の間で活発な意見が交わされる(写真は「TVF2013」の審査の様子)

◉京都が持つ力 そこから生まれる可能性

京都という場所には、大きな力が潜在すると思う。それは、歴史の蓄積だけではなく、土地の力と対話できる現在の可能性だと思う。その可能性とは魅力の発掘や再発見ということだけではない。この古都の中心や周辺で生きる人たちが、個人で作り上げ持続している「関係」を共有できる可能性だと思う。その共有は実体的な体験ではないかもしれないが、映像を通じて対話ができる、想像ができる、思いやることができる、発見ができる、そうした共有なのだと思う。土地が持つ固有の力と個人の関係が共鳴しあうときに、それはおおきな記憶財産となるのだと思う。この小さな映画祭が、そのための「場」のひとつであり続けて欲しい。

CHANGE The Movie

「小さな映画」の明日
——京都とパリから

杉原賢彦 —— SUGIHARA-Katsuhiko
映画批評家

■杉原賢彦(すぎはら・かつひこ) 1962年兵庫県生まれ。映画批評家、慶應義塾大学講師。日本フィルムアート社「シネ・レッスン」シリーズや「アートを書く!」などにおいて、映画および映画批評に関する考察を執筆。また、紀伊國屋書店発売DVDの解説を多く手がけているほか、IVCフランス文芸DVDシリーズの解説も執筆。それに並行して、慶應義塾大学、目白大学などで映像/映画に関する講義を担当。

◉ディジタルが可能にした〈小さな映画〉

〈小さな映画〉ということばが、京都国際インディーズ映画祭、京都映像アワードを通してようやく定着しつつあるように思える。

見栄えよく飾り立てられてはいるものの観客からそっぽを向かれつつある娯楽映画から、身のまわりのものを見直し、みんなに伝える。そんな何気ない映画の姿は、テクノロジーが身近なものとなったディジタル時代になって初めて可能になったものかもしれない。フィルムの時代、とにかくやたらと時間と予算がかかった映画制作は、いまやパソコン1台とDVカムがあればできる……いや、もっと気軽にかんたんに、スマホ1台があればできる時代なのだ。

ところで、京都映像アワードの参加作品や、その他さまざまな短編映画祭のエントリー作品を審査してて気づくのは、あるパターンの存在だ。

パターン……とはいっても、なにか様式のようなものではない。もちろん、作品の根底にあるアイディアや語りたいこと＝テーマの固定化でもない。むしろ、こう言ったほうが分かりやすいだろうか――映像づくりのお手本にしているのはなにか？――と。

子どものころ、私たちは教科書やノートに薄く描かれた文字をひとつひとつなぞることによって、文字やことばを覚えていった。いくつも、何年にもわたってそれは繰り返され、きちんとした日本語を、文字どおり身につけていったのだった。

それでは、いま、なにをお手本にして映像づくりが行われているのだろうか――？

◉〝型にはまらない〟面白さ

映画好きなら即座に「映画！」という答えが返ってくることだろう。ところではたして、いまや映画そのものが見られなくなった時代だ。〈小さな映画〉は、ましてその反語でもある。

ぼくが気づいた数多いパターンは、テレビの「ドキュメンタリー番組やルポルタージュ番組のような」と言えばよいだろうか。行儀よく起承転結によって内容が区切られ、ナレーションによって説明が加えられてゆく……そんなような作品が目立つように感じている。むろん、そうでない作品も数多く、そうした作品をこそ、京都インディーズ映画祭で紹介したいと考えている。

ここでいま、俎上に載せたいのは、お手本とすべき映像がなかなか見つけられなくなっているということなのだ。もっとも身近な映像であるテレビは、それ自体が悪いわけではけっしてない。テレビで見られる映像は、テレビという枠組みにおいてもっとも効果的な作法を確立してきた結果のものであり、その点で最善の映像であることに疑いはない。

テレビのモニタというフレームの存在と時間という枠を守ることが、テレビの映像には常に求められるのだ。その結果、人物は顔と表情が判別できるようバスト・ショットを中心にして撮られ、遠くを臨むようなロング・ショットはできるだけ排除される。また、できるかぎり正面向きのアングルで人物を撮るのが原則となってゆき、人物の動きはできるだけ抑制される（この典型は、韓流ドラマだ）。こうした決まりを守らないと、テレビのモニタのなかでは、なかなか言いたいことが伝わらないのだ。

つまり、さまざまにあった映像の可能性のなかから、テレビに適したものだけを選り分けて利用することによって、効果的な番組づくりを行ってきたということなのだ。

では、〈小さな映画〉をつくるために、これが理想的かというと、けっしてそうではないことは、容易に推察いただけるだろう。

大江能楽堂の、真っ白なシーツを利用してしつらえられた京都国際インディーズ映画祭、京都映像アワードの作品を映し出すスクリーンは、映画が始まったころ、まだなにもなかった時代を反映するものでもある。そこにがんじがらめの規則など無用。誰もが、自由に、自分の好きな色に染めてよい空間と時間なのだ。

それを、ある一定の型にはめてしまうなんて、それこそ「も・っ・た・い・な・い」ことではないだろうか?!

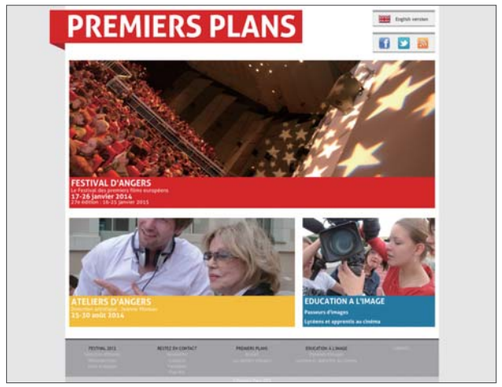
◉映像制作をもっと身近に

今年の京都映像アワードへの推薦作品で、字幕が間に合わないとのことで涙をのんで外した作品があった。フランス・パリ在住の女性からの作品だったのだが、新人映画監督の登竜門としても知られるアンジェの短編映画祭に参加された折につくられたものだった。

若く有望な映画監督を何人も送り出してきたこの映画祭では、作品上映の一方で、映像制作のワークショップも行っているのだ。ワークショップといっても、映画作家を目指す若者をとくに対象にしたものというよりも、市民が気軽に参加できる場となっているという。期間は1週間で、参加費用は20ユーロ（およそ2800円）。

参加した女性の言葉を借りてみよう――「今回私は、短編ドキュメンタリーの制作アトリエに、9歳の娘と参加してみた。（……）3、4人でひとつのチームを組み、それぞれ5分の短編を共同制作する。私は娘と、監督業を目指す若者ふたりの計4人でチームを組んだ。撮影対象は相談の末、城館の修復をする石工職人に決めた。アトリエ第1日は〈準備〉。講師である映像作家グザヴィエ・リエバール氏の講義から幕開けた。『先入観を避ける』『話を聞くスポンジになる』『日常のカオスから宝石を探す』『ピンチはチャンス』など、ドキュメンタリー作家の心構えを伝授してくれた。また機材に慣れるため、町に出て短いシーンを撮るという実践も行った……」と、型にはまった教授は行わず、実践的に、撮影対象とテーマに合わせた撮り方や編集を探っていったという。

お手本を探すのは、たいへんなことだ。〈小さな映画〉のために決まった教科書はまだないのだから。でも、こうしたワークショップや〈小さな映画〉を見て、語れる場所があったらどうだろう……？ 誰もがDVカムとパソコンで、あるいはスマホで映像作品をつくれる時代。そんな機会さえあれば、〈小さな映画〉は、もっともっと身近な存在になってくれるのではないだろうか――。



◀（上）アンジェの映画祭「プルミエ・プラン」の公式サイト
（下）短編ドキュメンタリー制作アトリエのお知らせページ

▲築100年の能舞台に布スクリーンを張って映画上映。京都大江能楽堂で

▲自前のホームビデオカメラで「とにかく撮ってみよう！」のワークショップ（KYOTO Mediala）

CHANGE The Movie

人と人の縁を紡ぐ映画祭

谷元浩之 —— TANIMOTO-Hiroyuki
短編映画祭ディレクター

京都国際インディーズ映画祭&京都映像アワードが、7年目を迎えました。これまでの活動を通して、我々は、普段目にする機会のない作家性やメッセージ性、または市民目線などに比重を置いた映像作品を紹介して来ました。その流れの中で、確実に何か「芽」のようなものが、この京都に根付いている事を感じています。その「芽」は、一目には気づかない程の小さな芽かもしれませんが、地中には、これまで出会った様々な人と人の縁によって紡がれ、「物語」という養分を蓄えた巨大な根が貼っていて、そこから新たな「物語」が、また次々と生まれようとしています。そんな出来事を象徴するような事が、昨年起きました。トルコ、フランス、東京で紡がれた小さな物語が、ここ京都と繋がり、そこで更に養分を蓄えた結果、昨年、やっと発芽したのです。

2009年当時、私は日本で唯一だったオンライン国際短編映画祭「CON-CANムービー・フェスティバル」を運営していた時に、トルコ／フランス出身のチャーラ・ゼンジルジとギヨーム・ジョヴァネッティ監督の作品と出会いました。監督渾身の作品「アタ」のグランプリ受賞の連絡をした時、彼らは、パキスタンのヒマラヤ山脈付近で丁度撮影を終え、キャンプ地に向かっていました。携帯の電波が殆ど届かない状況の中、自分が千駄ヶ谷からかけた一本の電話が、奇跡的につながったのです。その数週間後、彼らは、成田空港に降り立ちました。そこで、我々は初めて出会い、お互いの文化やクリエイティブを限られた時間の中でシェアし合い、一つの小さな映画を生みました。

その1年後、彼らは、フランスのアーティスト・レジデンスプログラム「ヴィラ九条山」に選出され、再び日本の京都に戻ってきました。そこで、京都国際インディーズ映画祭&京都映像アワードと出会い、一言では表現出来ない程の交流が、様々な人との間で生まれました。お互いの文化を個々が物語に翻訳し合う日々でした。そこで培った数々の交流が、2012年、一つの壮大な物語「芽」に発展したのです。彼らが触れた日本の文化、出会った人々から貰った小さな物語の数々が紡ぎ合い、「人間」という一つの物語「映画」を生み出しました。

トロント国際映画祭でワールドプレミア上映された「人間 ningen」上映後のQ&Aセッションも大いに盛り上がった

京都に滞在した日々の生活の中で、監督は様々な物語を日本人から貰いました。「狐と狸の化かし合い」「古事記」「神道」「企業文化」「夫婦愛」「友情」といった様々な物語が紡ぎ合い、「人間」という物語が、紡がれたのです。そして、トルコ、フランス、東京、京都をつないだこの映画が、昨年の9月、世界6大映画祭の一つ、カナダのトロント国際映画祭に入選し、今度は、トロントという土地に、新たな種を撒きました。トロントで、「人間」を観た観客の中から、今度は、また新たな芽が芽生えるかも知れません。そして、この「人間」は、きょう現在、カナダ、インド、ギリシャ、エストニア、フランス、アイルランド、トルコの7カ国に種を撒いています。この種を撒く土壌を作っているのが、各国の映画祭なのです。

手弁当で活動してきたこの京都での7年が、確実に何かを生み出している事を、我々は感じています。それは、映画祭という場が、地域社会の人々に何を提供出来るのかという問いに対して、我々運営側も少しづつアクションを起こせるようになった事の現れかも知れません。映画／映像の定義が、今程、曖昧になって来ている時代はないかも知れませんが、でも、人は「物語」を通して、世界を少しずつ理解して行けるのだと思います。その物語を豊にするのは、個々が大切にしている文化です。そして、その文化を紡いでいるのは、個々が大切にしている日々の生活の積み重ねである事を、我々は、映画祭という活動を通して、社会に伝えようとしているのかも知れません。この7年の間には、東日本大震災含め、大きな変革が幾つか起こりました。国、地域、社会、経済、教育、家族など、生きる事に関わる全ての分野においても、多くの人がこれまでの「当たり前」をリセットされた数年だったと感じています。そんな日常の意識の変化に対して、映画／映像というものが、今どのような役割を担えるかという事を、これからも観客と共に考えて行きたいと思っています。

■人間 ningen
2013年／日本＝トルコ／104分
日本語、中国語／カラー／DCP、Blu-ray
監督：チャーラ・ゼンジルジ（トルコ）、ギヨーム・ジョヴァネッティ（フランス）
出演：吉野眞弘、李小牧、和島政子、鮎川めくみ、佳卓、千松信也 ほか
撮影：角田真一　録音：鈴木昭彦
ライン・プロデューサー：田中深雪
プロデューサー：谷元浩之
製作総指揮：吉野眞弘
製作：株式会社メディア総合研究所
協賛：三井住友銀行
協力：京都国際インディーズ映画祭
京都映像アワード
配給＋宣伝：メディア総合研究所

■谷元浩之（たにもと・ひろゆき）
グアテマラに生まれコロンビアで育つ。日本、南米、北米を行き来する生活を送る。タフツ大学にて芸術文化を専攻。卒業後、ニューヨークで映像業界に入り、日系テレビ報道番組の映像編集を担当。9.11の際は他の日系局の制作もサポートした。NY滞在中に初めて映画祭に参加、ショートフィルムやアートハウス映画に衝撃を受け、次第に映画祭の世界に関わるようになる。帰国後、オンライン短編映画祭「魂観（CON-CAN）ムービーフェスティバル」の運営を担当。形式、ジャンルを問わず、常に多様な社会／文化価値を顕在化している映像作品を探し求めている。2009年に初めて製作した短編映画「SIX」はロカルノ国際映画祭短編コンペ部門に入選、マカオ国際映画祭にてグランプリを受賞、その後、ロッテルダムやタンペレを始め、数多くの国際映画祭で上映された。2013年、初の長編映画「人間-ningen-」を製作。第33回トロント国際映画祭にてワールドプレミアを迎え、現在、国内での一般公開を控えている。審査員として、アート・フィルム・フェスト（スロバキア）、サンパウロ国際短編映画祭（ブラジル）、テヘラン国際短編映画祭（イラン）などにも参加している。

1　「人間 ningen」撮影部の準備の様子
2, 3　京都での撮影風景（2 京都市内、3 伏見稲荷大社）
4　トロント国際映画祭にて是枝裕和監督とともに記念撮影をする監督、出演者、プロデューサー

◉京都国際インディーズ映画祭、京都映像アワードから見えてきたもの

底知れぬ可能性を秘めだした「小さな映画」

京都から世界へ
小さな映画が時代を変える

京都国際インディーズ映画祭
京都映像アワード
●代表・広瀬之宏……*Yukihiro-Hirose*

■**広瀬之宏（ひろせ・ゆきひろ）** 1952年京都府南丹市生まれ。大阪芸術大学デザイン学科卒。クリエイティブ・ディレクター。有限会社ハーディセカンド代表。京都国際インディーズ映画祭・京都映像アワード代表。京都メディア・アート・ラボ代表。京都造形芸術大学非常勤講師（2012-）、神戸女学院大学非常勤講師（2001-2013）。広告制作、編集、出版、イベント、商品開発などのクリエイティブ活動の他、行政の地域振興計画策定、環境計画などの企画運営コンサルや障害者福祉の運営計画などに携わる。自然環境や教育、アートをテーマにした活動など多彩。美術文化展奨励賞、グッドデザイン賞、国立大学優秀広報誌表彰・最優秀賞・最優秀デザイン賞受賞など多数。現在、映像制作をはじめ自然環境とアート、教育を基軸に世界ネットの動画の教育的活用を推進。著書に、点字と絵本の同時訳本「友だちがきました」、「答えは一つとは限らない」（遊タイム出版）など。

●感性が目を覚ます時代

2013年11月17日に「京都国際インディーズ映画祭」および「京都映像アワード」の受賞式が行われた。開催場所は、昨年に引き続き、築百年を越える桃山様式の建築で、京都の建築遺産ともいえる京都大江能楽堂。座敷と桟敷席でゆったりと映画鑑賞ができる贅沢な会場。日本でも数多くの映画祭があるが、能舞台で上映しているのは、京都国際インディーズ映画祭だけではないだろうか。

さて、第7回を迎えた本年度は、海外、国内を問わず、個人が映像メディアを手にし、気負いなく作り上げた作品が多かったように感じる。おそらくカメラや編集機の精度が格段に向上し、手軽な値段で買えるようになったため、扱いも一気にレベルアップしてきたのであろう。気軽に遊び感覚で動画制作ができることが、映画の質の向上と、今までにない自由な表現の発見に結びついているのであろう。

お金がないから到底映画の機械など買えないと思っていた優秀な才能と感性の持ち主たちが、目を覚ましつつある。もはやプロとアマの境界が、この分野でもなくなりつつある。

●メディアとしての映画と映画祭

今年の京都映像アワードの受賞作品には、それぞれに明快なメッセージが読み取れる。社会派ドキュメントから地域や社会の現状に目を向けたもの、個人の心象を普遍的に表現したものなど、編集にも個性が浮かび上がった。海外からの作品では、世界中の貧困および紛争地帯で医療活動を行っているイタリアのNPO「エマージェンシー」の活動を追ったドキュメンタリー作品。イタリアの〈OPEN HEART〉が、しっかりとテーマに向き合う姿勢と、丁寧な作品づくりで、海外作品賞に輝いた。また、この作品は、2013年度アカデミー賞ベストドキュメントにノミネートされたが、まだ日本で上映されていなかったので、日本語字幕がなく、上映日ギリギリで間に合った。本映画祭が日本初上映となった。

日本からは、日米原発メルトダウンの現実を突きつける渾身のドキュメント、堀潤監督の〈変身〉が、特別賞を受賞した。本来、京都インディーズでは短編の映画祭であり、この作品は63分で対象外になる。しかし、未だ解決しない福島原発をジャーナリスト目線で追いかけ、マスコミが流さない情報を映画で発信する点が、これこそインディーズの共有するところであると評価され、規定を外して特別賞上映となった。この作品も本映画祭が、一般公開前の先行上映となった。

この2作品の共通点は、作品が、鑑賞するための娯楽作品ではなく、作品自身が、自分が活動するためのプレゼ

ンテーションであり、社会ニュースになっている。いままでの劇場映画とは全く基軸が異なる。映画をアートではなく、NET感覚の自分発信ツール、メディアとして使いこなしている力強い作品である。

●めざましく台頭する高校生監督

今回台頭してきたのが、高校生作品だ。埼玉県立芸術総合高等学校から3作品がノミネートされた。いずれも学校を舞台にした作品だが、日常の自分たちを取り巻く生活を実によく観察している。思春期の悩み、家族とのつながり、仲間との関係、気づかないほど小さな面白さなど、どこにでもある彼らのシーンを丁寧に作品にしている。

本映画祭では、「into日常」の坂本奈央さんが、審査員賞、「あそぶ」の澤田彩織さんが、関西テレビ賞、「きっと世界は素晴らしい」の川滿佐和子さんが入賞した。

彼らの作品は、テーマ設定とそれを表現するストーリー立て、カメラワーク、編集など、どれもがハイレベルで高校生の作品とは思えないほど。さらに、配役も彼らが演じている。

そこで、なぜこんなに優秀な作品ができるのかを聞いてみた。

するとうなづける答えが返ってきた。この高校は、普通科がなく3年間を通じた授業で、卒業に必要な単位を修得する単位制で、学期は前期と後期の二学期制。そして、創作者には嬉しいノーチャイム制。集中力を邪魔されない。思い存分創作や研究に没頭できる訳だ。すぐれた作品は、こうした創作環境がうまく作用しているに違いない。

●プロが威張れない時代

京都国際インディーズ映画祭は、2007年設立以来、7年目。おそらく日本で一番小さな国際映画祭ではないだろうか。

運営は、全くの自主独立で、映画や映像好きな仲間、作家や上映システムのプロ、デザイナーや教育関係者など、制作から配信などのスペシャリストが集まって、面白がって活動を続けている。

いまや映像、映画の世界が、特別なジャンルではなく、スマホでもデジカメでも簡単に撮影できる時代なので、プロじゃなくても気軽に動画が撮れる。手始めの編集だとNETで無料の動画編集ソフトもダウンロードできる。

そして、プロじゃないから一見無謀な使い方もする。そこから新しい表現方法も出てくる。プロの方がかえって形式に縛られて、奇麗だけれどつまらない、ということが多々あるように感じるのは、私だけではないと思う。

幼稚園児の絵が、時には大作家の絵よりも感動するのに似た現象が起きている。

そうして生まれた作品は、おのずと旧来の映画人が学んだノウハウや手順とも異なる。だから当然作風も異なる。そして、それがまた次の新しい表現やメッセージを呼び覚まし、創作の起爆剤となる。

固定観念からは、何も生まれない。

京都インディーズは、こうした次の時代に挑戦する映像作家の原石を探しているのです。

映像がNETと化学反応した時、時代は変わる。

●小さな映画の底力

小さな映画とは、短編映画やほんの数十秒の作品とイメージすればいい。なにも作品と考えなくても、記録映像と捉えても差し支えはない。写ってさえいれば何十年もすると時代の証人としての価値も出てくる。大層に考えなくても、写し、楽しむことが大事。

コンパクトに作品を仕上げる技術に長けた、ノウハウを持った新しい映画作家たちには、共通の特徴がある。それは、映画づくりに必要な素材制作をかなりの部分まで自分で作ってしまう。シンガーソングライターだ。音楽と同じ、感覚さえあれば作ってしまえるのだ。音楽業界がシンガーソングライターの出現によって変わったように、映像の世界も必ず変わる。

いまは、撮影から編集、サウンド、エフェクト、上映まで、全てがデジタルなので、パソコンがあれば100%自作が可能なのである。

さらに上映環境も映画館でなくてもNETで配信すれば何千万もの人々に見てもらえる可能性もあるのだ。

NET配信で火がつき、テロが起き、国が崩壊する時代。また、ある日突然名もなき人が世界のヒーローやヒロインになる時代。いままで聴こえなかった声が聴こえ、届かなかった声が届く。映像がNETと化学反応した時、時代は変わる。

京都国際インディーズ映画祭は、アナログとデジタルを楽しみながら温故知新を肌で感じられる古都・京都から社会に役立つ原石を探し求め提供しようとしています。

京都映像アワードは、未来への通行手形です。きっとお役に立てると信じています。みなさんの思いを映画に乗せて飛ばしてください。キャッチします。あなたの映像が、時代を変える。

■ 第7回京都国際インディーズ映画祭・第2回京都映像アワード 上映作品

▼2012年度入賞作品・未上映作品

『Kaizer』
監督・田中廣太郎(日本)
2006年／10分19秒
● 第1回京都映像アワード入賞作品

『願いをひく』
監督・中沢あき(日本&ドイツ)
2006年／4分35秒
● 第1回京都映像アワード入賞作品

『Mornin'』
監督・田中廣太郎(日本)
2008年／1分
● 第1回京都映像アワード入賞作品

『ここにいることの記憶』
監督・川部良太(日本)
2007年／28分
● 第1回京都映像アワード入賞作品

『Backwash』
監督・田端志津子(日本)
2012年／4分
● 第1回京都映像アワード入賞作品

『方舟 ～荒れた土地に』
監督・佐藤博昭(日本)
2001年／10分15秒
● 第1回京都映像アワード入賞作品

▼2013年度入賞作品

『国山神事』
監督・戸田 博(日本)
1983年頃／28分

『OPEN HEART』
監督・キーフ・デヴィッドソン(イタリア)
2012年／40分

『きっと世界は素晴らしい』
監督・川滿佐和子(日本)
2013年／15分
● 埼玉県立芸術総合高等学校映像芸術科作品集

『限界集落に命の糧と元気を運ぶ～二人三脚の移動販売車～』
監督・内田一夫(日本)
2013年／16分55秒

『BENTEN』
監督・ピエール・パルー(フランス)
15分22秒

『あそぶ』
監督・澤田彩織(日本)
2013年／9分51秒
● 埼玉県立芸術総合高等学校映像芸術科作品集

『BUHAR / 蒸気』
監督・アブドゥラリム・オネル(トルコ)
2013年／12分

『Ninja & Soldier / 忍者と兵隊』
監督・平林勇(日本)
2012年／10分

『Gray Zone』
監督・塚原真梨佳(日本)
2012年／12分39秒
◉ 第2回京都映像アワード グランプリ

『into 日常』
監督・坂本奈央(日本)
2013年／13分36秒
● 埼玉県立芸術総合高等学校映像芸術科作品集

『おくりもの』
監督・佐藤好子(日本)
2013年／8分12秒

『変身』
監督・堀 潤(日本)
2013年／63分
● 特別上映

Kyoto Movie Platform
Kyoto Movie Awards

▼京都メディア・アート・ラボ

■メディアラの目的

世界における京都の国際的知名度は、日本国内では東京に次いで京都が第2位である。(データ出所：http://rank.export-japan.co.jp/)歴史・文化的には世界遺産の選定数が示すように国内トップである。そこで本プログラムは、世界のインディーズ映画(自主制作短編映画)をとおして、京都の国際的知名度(京都のブランド力)を活かしながら、海外との交流を図り、情報、頭脳、感性、技術、システムなどを相互交換させながら地域の文化力と教育力を高め、同時に地域経済の発展への導線を構築することを目的とする。

本事業は、近年のIT (Information Technology)化およびデジタル革命を理解し、映像・映画作品(2009現在・67カ国・約3000作品を管理)をコンテンツとして、グローバルな観点から文化、教育、経済的に有効な具体的な活用を充実させるために、ソフトおよびハード面での基盤整備をする。

また世界のプロの映画監督とのつながりとその優れた才能を人的資源と考え、教育支援、文化交流、企業連携など、あらゆる可能性を探りながら、＜産官学地＞の連携で地域の多様な質的向上に役立たせる。

■活動内容

「メディアと映像で地域力を高める」――――
メディア新時代に対応した映像の活用と地域力の向上を図る

◉世界の映画人の作品、才能、頭脳、ノウハウを京都に流入

◎「上映会」本映画祭ブレーンが培ってきた海外の映画祭や映画監督、制作者などのコネクションを最大限に利用し、京都全域で大小の規模に関わらず、積極的に映画上映会や講演活動を行い、世界の映像を身近に触れる機会を創り、異文化のカルチャーを京都に流入させる。

◎「海外生中継」海外の監督や映画製作者が来日または招聘した時には、生トークの機会を持って実際にプロと関わりながら学ぶ機会を作る。また時には、会場と海外映画人を直接結び、海外とライブ中継をしたり、そこで斬新な映画作りのノウハウや感性、メディアリテラシーなどを学ぶ機会を創出し、優秀な映像メディアクリエイターの育成を支援する。

◎「講演会」映画・映像の研究会、講演会、講座などを実施し、誰でも気軽に学べる機会をつくり、地域住民に映像やネットについての理解力を高め、生きるヒントと方法を学んでもらう。

◉誰でも見られるインターネットＴＶ「KYOTO MEDIA ARTS LAB.」(京都)で地域情報の共有・交換

◎インターネット社会と言われながら、現状はまだまだ使いこなすレベルの格差は大きく、充分な活用に至っていない。特に地方ではネットラインの整備すらできていないところもあるのが現状。また2011年から開始の地上デジタル放送と多チャンネル化は、映像メディアだけでなくマスメディアの環境を大きく変えるであろう。そこで映像や情報の発信モデルとなるインターネットＴＶ局「KYOTO MWDIA ARTS LABO.」(キョウト・メディアアート・ラボ)を立ち上げ、社会ネットのキーステーションを作る。

◎作品や情報を管理し、受発信する。都市と地方をつなぐ映像情報拠点を目指す。情報コンテンツは、教育、ビジネス、イベント、観光などチャンネルごとに利用しやすく設定する。本チャンネルを持続可能に発展するためにBtoB、BtoC、CtoCの環境整備および基盤整備を目指す。

◉世界の映像コンテンツの教育的活用

◎本映画祭が管理する世界67カ国、約2000作品の動画、アニメ、ドキュメントなど優れた短編映画をデジタル教材として活用する。国際感覚、異文化理解、語学力、構想力などを身につけるための教育マテリアルとして活用。将来の子ども達への感性教育に重点を置き、少子化、高齢化社会に適応した小・中・高・大学・生涯学習の学習プランとして新しい教育コンテンツを提供する。すでに日本の大学でテスト授業をし、教育成果も上げている。現在、デジタル教育材として登用準備の整備とデジタル教育のための教育コンテンツの制作を進めている。

◉クリエイターの海外交換留学を支援し、地域力を高める

◎本映画祭の海外ブレーンや組織力を活かし、今後映像クリエイターの海外研修や日本での海外研修者の受け入れ体勢、紹介システムを整備する。大学、撮影所、行政、企業などと連携して学術・文化・地域産業等、地域力の向上を目指す。京都の観光産業や大学の海外留学生の獲得等に反映されることが期待できる。そのためのネット環境やハード面での基盤整備を進める。

◉京都ブランドを世界に「京都発→世界」の取り組み

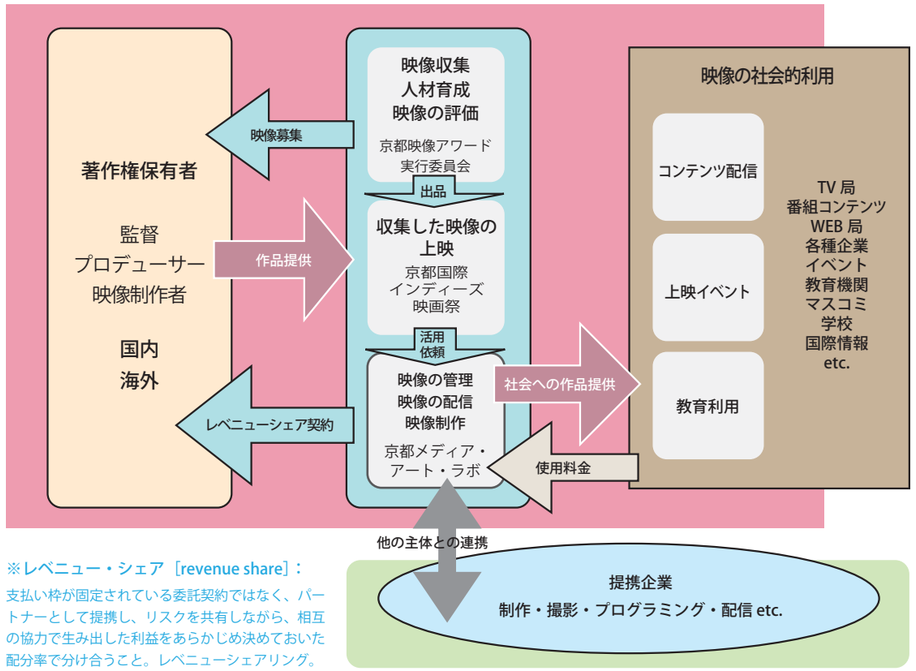
◎古都・京都ブランドを活かし、世界のインディーズ映画監督に京都を舞台にした撮影や映画製作を積極的にアピールし、京都での撮影に関する情報提供と誘致を図り、府の積極的な支援と連携で、国際的に映画の町・京都をアピールするための情報ネットの整備をする。

◉事業実施に向けた広報

◎京都メディア・アート・コンソーシアムが実施する「メディアと映像で地域力を高める」活動を、広く社会に訴求し関心を高めるために、スキルアップしたウェブサイトを立ち上げ、ホームページ作成やパンフレット制作、プロモーション映像などを制作する。またマスコミ等広報機関に積極的にニュースリリースを配信し、効果的な企画のアピールを図る。

京都映像アワード　「レベニュー・シェア・プログラム」のご案内

▼ 京都映像アワードに関わる各主体の関係図



※レベニュー・シェア［revenue share］：
支払い枠が固定されている委託契約ではなく、パートナーとして提携し、リスクを共有しながら、相互の協力で生み出した利益をあらかじめ決めておいた配分率で分け合うこと。レベニューシェアリング。

京都映像アワードでは、全ての映像作家にその門戸を開き、作家の作品に込めたメッセージを世界の視聴者に届けることを使命としています。この活動を通して、作家と社会をつなぎ、主に教育や公共面において作品上映の機会が発生し、収益が生じた際には、作品の権利保有者に対して利益を還元する事を目的とした「レベニュー・シェア・プログラム」を設け、提案させて頂いております。

このプログラムは、ショートフィルムの認知度が低いと言われている日本において、ショートフィルムが文化的、教育的に利用される場合に有効で力を持ったコミュニケーション・メディアであることを知って貰う事を目的としています。本プログラムに賛同いただける作家の方に対して日本国内におけるライセンシーとなり、公的な施設を始め、大学や高校といった教育機関における映像作品のプログラミング、上映、放送、自動公衆送信、DVD パッケージの提供などといった、主に文化、教育目的にフォーカスした配給を行っていきます。また、商業的な利用が可能な場合も、需要の可能性を探り、対応してまいります。このような活動の対価として売り上げが生じた場合、その利益を作家とシェアする事で、作家の活動を支援するとともに、より多くの視聴者に作品の文化的、教育的な価値を深く理解していただけるプログラムと考えています。

京都映像アワードへ応募予定の皆様にはぜひこのプログラムをご理解、ご利用いただき、少しでもショートフィルムの認知度を広げ、次回の作品制作の一助としていただければ幸いと思います。

「レベニュー・シェア・プログラム」への登録を希望される方は、作品の審査後に追って事務局から手続きのご連絡を致します。

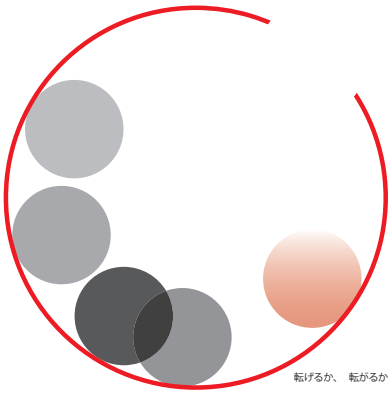
＊「レベニュー・シェア・プログラム」への参加・不参加が、映画祭への作品審査に影響する事は一切ありません。
本プログラムへの参加・不参加の情報は予備審査、及び国際審査関係者には一切公表されません。

Mediala
KYOTO Media Arts Lab. Information
No. 2 March.2014
メディアラ［京都から世界へ］
メディア・グラフィック
●発行日・平成26年3月31日 ●発行・京都メディア・アート・ラボ http://www.kyoto-media-arts-lab.jp
●編集・有限会社ハーディセカンド 〒542-0081 大阪市中央区南船場2-10-28 下村ビル404号
●協力：京都府・京都市＜京都府地域力再生プロジェクト支援事業＞

KYOTO JAPAN
Now, to Be

作品募集中!

京都国際インディーズ映画祭
京都映像アワード



京都映像アワードは、
短編映画を募集しています。
あなたの身近なシーンを映画に!
テーマは自由です。
あなたが「伝えたい、記憶に残したい」と思ったことをテーマにしてください。

・地域の歴史や文化、しきたり、風物の記録
・身の回りの出来ごとやニュース
・自然環境、観光資源、地域の風景自慢
・教育の取り組み、伝えたい教え
・残しておきたい地域の産業、匠の世界
・ドキュメンタリー
・フィクション・ドラマ
・アニメーション・アート
・その他、年齢・性別・国籍などジャンルは問いません

あなたでないと見つけられなかったシーンを
ぜひ短編映画にして ご応募ください。

★優秀作品は、教材や地域活性、産業支援に活かされます。詳細は、出品要項をご覧ください。お問い合わせは、下記事務局まで。

KYOTO Media Arts Lab.

◉「メディアラ」特別編集版
京都発!「記憶と未来」

◎2014年3月31日・発行
◎発　行：京都メディア・アート・ラボ
発行者：広瀬之宏
〒629-0151 京都府南丹市八木町南広瀬砂子 39-1
事務局：〒542-0081 大阪市中央区南船場 2-10-28 下村ビル 404 号
U）ハーディセカンド内／TEL.06-6241-0522
◎デザイン・編集：U）ハーディセカンド／広瀬之宏＋川端一実
◎写　真：吉川譲＋広瀬之宏＋長井喜美＋今井悟朗＋西村一馬＋川端一実＋佐藤博昭＋太田頌子
◎印刷所：恒和プロダクト
◎出版協力：京都府・京都市＜京都府地域力再生プロジェクト支援事業＞
©Kyoto Mediala,Y-Hirose
＊本紙掲載の写真および文章の無断転載を禁ず。著作権で保護されています。
＊本紙は非売品です。ご入り用の方は送料を添えて事務局にご連絡ください。

KYOTO Media Arts Lab.